
Infinite Stratos Pray for Answer

The Fool

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Stratos Pray for Answer

【Nコード】

N0060Y

【作者名】

The Fool

【あらすじ】

誰も知り得なかった。隠された真実が、今、解き明かされる。真実を見極めろ、全ては「答え」のために。

prologue (前書き)

前回書いた小説を反省しこれからは真剣に書いていきたいと思ひます。

prologue

それは遠い記憶。

果ての見えないほどの広さをもった庭。

その広大な庭は、今、艶やかに彩られ、花卉が風に運ばれて。夜空へと舞い上がる。舞う吹雪はその全てが桜色に染まって。吹雪を描く結晶は桜の花卉。庭に咲き誇る幾重もの桜の木々は、そのどれもが満開を迎え、春という季節を謳歌していた。

ひとりはまだ幼い少年。烏の濡れ羽色の長い頭髮は桜の花卉をかたどった髪留めで後ろに結ってある。

ひとりは全身を淡い墨色に染め上げる鎧を身に纏った。武者さながらの格好。

銀色の鋒^{やぶ}両刃造の太刀は両下腕にそれぞれ長さが違うが一本ずつ装備している、墨染め中で一点、煌びやかに映える。夜月の下に咲く桜を見上げながらふたりは会話を交わす。

——あなたは何のために戦うのですか？

ふたりの視線の向こうにあるのは、広大な庭の天蓋とでもなからうかというほどの巨大な桜。

——僕は平和のために。

願えども願えども願いは叶わず。

——僕は未来のために。

登れども登れども墜ちて爪は剥げ。

——僕は理想のために。

走れどただ走れど辿り着けず。

——僕は愛する人のために。

想え想えども想いは届かず。

——僕は自由のために。

手にしても手にしても壊れてしまう。

——僕は家族のために。

贖えど贖えど罪は消えず。

——僕は国家のために。

戦えども戦えど傷は癒えぬだけ。

誰がために戦い続けて、己の存在意義を探して、何を守り、何を犠牲にして、戦いの向こう側にある、己の導き出す「答え」を求めて・
・・・今を戦う。それは誰もが抱える命題。

やがて、ふたりの姿は桜花の舞に掻き消されていき。桜の木の傍には誰も居なくなっていた。

prologue (後書き)

感想・評価・誤字・脱字などお聞かせください。

第零話 前兆 (this is the end) (前書き)

これは過去編です。やや強引すぎるような展開ですが。楽しんでもらえると思います。

第零話 前兆 (this is the end)

ドイツ連邦共和国。

国内軍事施設。

そこでは現在――。

「何としても奴らをここで阻止しろ！ もう、これ以上、先には行かせな！」

「相手は同じ人間だ！ やれるはずだ！」

「クソッ！ 効いているのか？」

「泣き言なんか言うな！ 撃て！ 撃ちまくれ！！」

「パンツァーファウスト3を持ってこい！！ 銃火器だけでは対応できない！」

「こちら5-Dエリア！ 侵入者二名と交戦中。敵はISを展開している！ 至急救援を求む！ 繰り返す、侵入者二名を確認！ 敵はISを展開している！ 5-Dエリアに大至急救援を求む！」

軍施設に鳴り響く警報器のサイレン音。

絶え間なく続く銃声は、さらなる銃声に埋もれ。兵士たちの怒号は、新たな怒号にかき消される。それらは全てふたりの侵入者に向けられていた。

ひとりは背部から黄色と黒の配色で蜘蛛の足にも似た八本の装甲脚を背中にはやした、ISを纏い。

もうひとりは無塗装の白の装甲。尖鋭なシルエットのISを纏っている。

「面倒な展開になったな……」

独特のカメラアイ型ハイパーセンサーで顔を隠した白色のIS。

レイレナード社製。第二世代型『02-AALYAH』を纏った人物が呟きながら右手に握る、フルオートからセミオートに設定を切り替えたマシンガン《01-HITMAN》が放つ弾丸に次々と兵士たちが倒れていく、だが殺してはいない致命傷を免れるように狙って撃っている。

「うるせえ！」

憤怒の言葉とともに、女は蜘蛛を模したIS。アメリカ合衆国製、第二世代型『アラクネ』の八本の装甲脚のうちの二本を使い、まわりつく兵士たちを薙ぎ払う、こちらも兵士が死なないうよう、ある程度に手加減はしている。

「オータム、お前が初歩的なミスなんかしなければ、穩便に済んだものを……」

白色のIS『02-AALIIYAH』を纏った人物が億劫そうに、オータムに聞こえないように毒づく。

「てめえ！ 今、何て言った？ 殺されてえのか！？」

オータムの怒号と一緒に前方三十五メートルにある広場からパンツーフアウスト3を掲げる兵士五人から弾頭がほぼ同時に発射され、五つの直径十五センチの成形炸薬弾頭は直後に安定翼が展開してロケットモーターに点火、加速しながらふたりに向かって飛翔する。狭い通路の限定空間では回避運動が取れない。避けきれないと判断した『02-AALIIYAH』が飛来してくる五つ成形炸薬弾頭を瞬時に『01-HITMAN』で的確にそれぞれ七メートル手前で正確に一発で撃ち落とすと同時に起爆薬に引火し弾頭が爆発し轟音が響く。

瞬く間に狭い通路は閃光に満ち四散した爆発の衝撃波と熱波が通路を埋めつくす。

「「「やったか！？」」「」」

5-Dエリアの広場にいる兵士たちが声を上げる。通路が成形炸薬の爆発によって舞い上がった粉塵で視界が塞がれる。鉄が炙られて

炎が炎上しているのが見える。

兵士たちはそれぞれH&K MP7、H&K UMPを通路に銃口向け確認すると――。

ダッラララッララララララッラララッララッラッラ――

――

粉塵と炎が舞い上がった通路から閃光と炸裂音が次々に膨れ上がった。

「がっ!？」

「ぎゃ!？」

「ぐあっ!」

「本部! 本部! 至急増援を請う! これ以上持ちそうにない! ！ 繰り返し! 至急増援を――がっ!」

放たれた雨あられに降り注ぐ弾幕に次々に何十人の兵士たちが倒れていく。しかしその誰も致命傷になるような傷を負っていない。

「たいした障害も残っていないだろう。だがこれ以上、時間をかけるわけにはいかない、ISが来る前にさっさと目的のモノを奪って退くぞ」

『02―AALIYAH』の両手に握られた『01―HITMAN』のドラムマガジンが空葉夾さながら排出され、量子構成によって

新たにドラムマガジンが装填される。

感情のこもっていない声と排出されたドラムマガジンが床に落ちる音が粉塵と炎に満ちた5―D通路に響き渡る。

「私に命令すんなっ！ クソガキッ！」

ふたりが目指すのはこの軍事施設にあるドイツが現在開発途中である第三世代型ISの強奪であった。



「侵入者が5―Dエリアを突破！ 駄目です全く足止めできません！」

管制室は現在の状況が送られていく。管制室にいる誰もが危機感に迫っていた。

「侵入者は1―Eエリアに向かってます！ このままだと5―Eエリアにあるあれが・・・」

「まだ、システムは回復しないのか！？」

「それが、外部からのハッキングを受けて回復には時間が――」

「畜生！ ISが出払っているこんなときに限って・・・」

外部から救援を求めたいが出来ずじまいになっている。通信システムが何者かの手によって阻まれているからだ。それにISに対抗できるのはISにしかできない、生身の人間が立ち向かえる道理がない。ここにあるISは三機あるが、そのうちの二機は第三世代型で

現在開発途中であるISは形が既に出来上がって乗れることが出来ないこともない、がまだ試験稼働も武装もテストしていない状態である。

そしてその二機はそれぞれ現在研究開発区画5-Eエリアと5-Fエリアに保管しており、残りの一機は他の軍事施設に借り出し中である。

「クラリッサ大尉とアルフォンス班長を5-Fエリアに向かわせて班長に『シュヴァルツェア・ツヴァイク』の最終調整させてから大尉を搭乗させ、大尉を5-Eエリアに向かった侵入者と交戦するよう無線で通信しろ」

ここで侵入者を逃したらもう後がない、最後の望みは大尉に託すしかない方法がないのだから。

「えっ？・・・これは？」

「どうした？」

「E-5エリアに人らしき反応が！？」

「なっ！？ 何で今まで気づかなかった？ 隔壁は？」

管制室のオペレーターがコンソールパネルを叩きE-5エリアをモニターに映し出された隔壁状態を確認する。

「隔壁の状態は正常に作動していますが・・・そんな！ 一体どうやってここまで？」

◆ ◆ ◆
5-Eエリア。

ドイツIS研究開発区画 5-E通路。

低く、長く響き渡るサイレンの音色、ISの最先端技術を研究・開発する区画には天井には埋め込み式のライトが光を放っているそして扉や壁の標識にはドイツ語で《関係者以外立ち入り禁止》《重要機密》《注意》という単語が踊っている鉄の通路を駆ける少年には知るよしもない。

少年は桜の花弁を形をした髪留めで後ろに結って。烏の濡れ羽色の長い頭髮は走ること大きく揺れている。

区画のセキュリティの厳重は完全だった。扉という扉は分厚い防弾防爆仕様のものであり、いずれも指紋や網膜、IDカードによる認証を必要としているのだが。少年が5-Eエリアに“来る前からその区画にある扉はどれも解除され開閉が可能”になっていたのだ。少年がひととき大きな通路、天井は軽く二十メートルはある場所で立ち止まり辺りをキョロキョロしながら息を整える。その顔には確かな焦りが浮かんでいた。

（さっきの子。一体どこに行っただんだ？）

このドイツ国内軍事施設に現在、出張中の『霞スミカ』宛てに家に届いていた、インテリオル・ユニオングループの重要機密が書かれた書類を渡すため日本から赴いてきて、書類と一緒に霞スミカがいる現在、出張している場所が書かれた紙切れを頼りにドイツの国内軍施設にやってきた『霞^{かすみ}霊^{れい}二』はここに来た事情を入り口にいる兵士に話してみたら入場の許可をもらい。

兵士たちと同行しながらスミカがいる場所に向かっていたが突然の鳴り響く警報器のサイレン音、周囲が慌ただしくなる中で霊二は兵

士に言われた避難所区画に向かうとしていた途中で、この軍事施設には不釣り合いすぎる、軍服を着ていない、自分と同じ私服さながらのまだ幼いと思える銀髪の少女。

その少女はサイレンが鳴っているのにも関わらず避難所区画には向かわず奥に行く姿を見てしまった。

これは拙いと思った霊二は急いで少女の後を追ひ、避難所区画につれ戻そうと少女の下に向かったが一向に少女に追いつけずさらに施設の奥に進むことになってしまった。

（サイレンが鳴っているのに、何であの子は——）

辺りを見わたすと通路の右端にさっき見かけた少女が隠れてこちらを見ている。

霊二は咄嗟に少女の下に駆けるが少女は彼を見るなり逃げてしまうのだ。

さっきからこれの繰り返しである。

少女を追っていたら通路がそこで終わっていたのだ、いや、正確には閉ざされていた、通路の先には分厚い隔壁が降りている、先に進めなかった。

（この先いるはずだよな？）

立ち止まる理由はなく前へ進むと隔壁が物々しい駆動音を響かせながら左右に開いていく。

その向こう側を晒していく、扉が向こうには広々としたドーム、その中心に人の形をしたモノの前にあの少女がいた。

少女の背は低く、かなり華奢だ。年齢は十一歳か、それくらいに見える。頭髮は流れるような銀色の髪で、腰まである髪を太い三つ編みにしている。

少女の後ろには漆黒の人型が鎮座していた、それは人によっては鎧という印象は受けないだろう、けど細部は甲冑とはまるで違う。赤いラインが映えるような漆黒の機体、無駄のない洗練されたようなデザインをしたそれは間違いなく「IS」だったが今の霊二には無関係のモノだった。

「やっと、追いついた」

肩で息を整える。

「・・・・・・・・・・」

銀髪の少女は振り返る腰まで届く三つ編みが揺れる。

「ここは危ないよ、一緒に戻ろう」

霊二は少女に手を差し伸べるが少女は零二の手を取ることはなく。

「戻るにしても、ここを襲った人たちはISを纏ってわたしたちが通った道を辿ってここにやってきました」

淡々とした口調で少女がそう答えた。

「えっ!？」

侵入者がしかもISを装着してここに来ることは想定してなかった
霊二は驚きを隠せない。

少女をつれて戻るにしてもここまで通ってきた道を戻らなければなら
ない、そこで侵入者と鉢合わせになったら間違いなく――。

「このままでは、わたしたちが危険に晒されますこの状況を乗り切
るには“あなたがそこにあるISに乗って戦ってください”」

さりと、なんてとんでもないことを少女が言った。

「なっ!？ でもISは“女性にしか扱えない”よ」

その通りだったISは“男性には使えない”篠ノ乃東がISを世界
に発表してからちょうど八年と半年の間に男性がISを使えたなん
て事例が全くない。

「はい、その通りです」

それは少女も知っていた。なのにどうして少女はそんなことを言え
たのか？

「だったら、どうして？」

疑問を少女に聞いただと少女は。

「それはわかりません、ですが“あなたなら”もしかしたらって思
ったんです」

「・・・・・・・・・・」

その直後、やや遠くから爆発音、そして振動がドームに伝わってきた。すぐそこまで侵入者が迫ってきている。

「もう時間がありません。あなたに聞きたいことがあります、あなたには守りたい人がいますか？」

「・・・・・・・・・・うん、いるよ。ここに守りたい人が・・・・・・・・姉さんがいるんだ、そして目の前にいる君のことも」

霊二は頷く、ここに目の前の少女と守りたい家族がいる、そしてここにいる人たちも、その人たちを傷ついていくモノがいるのなら自分は戦う。でも相手は世界最強の兵器「IS」を装着している。

少女の口から出てきた言葉が霊二にとって忘れられないことだった。

「なら今は戦ってください」

初対面であるはずの少女が何を思ってそんなことを言ったかは霊二にはわからない。

「そして、いつか戦いの向こうに側にあなたの捜していた、求めていた『答え』が見つかるといいですね」

その言葉に後押しされるように霊二はドームの中央にある、漆黒のISに触ようとする直前、霊二は思ったISは“女性にしか反応しない”と、この機械は“男性である自分には反応するはずがない”のにと。

———そう思って、触れた。

霊二の右手が漆黒のISに触れた瞬間。

金属音が共鳴する高い音が頭の中に響いて。すぐに意識に直接流れ込んでくる膨大な情報の奔流。無数の閃光が点滅し、同時に万華鏡のような煌めきが意識を埋め尽くす。

———あ、ああ）

ISから送られてくる。夥しい数々の映像と音声の洪水。

基本動作、操作方法、性能、特性、現在の装備、可能な活動限界時間、行動範囲、機体の挙動情報、レーダーレベル、各部位のセンサー精度情報、火器管制システム^{FCS}、制動システム、PIC干渉領域、アーマー残量、出力限界値、コンディション、その他様々な雑多な情報が一緒にたになって、少年の意識に容赦なく流し込まれた。それはまるで長年熟知したもののように、極限にまで修練した技術のように、その全てが理解、把握できる。視覚野に接続されたセンサーが意識にパラメーターが浮かび上がって、周囲の状況が数値で知覚できる。

スキンバリアー
被膜装甲展開———完了。

シールドエネルギー出力調整——完了。

スラスタ
推進機正常作動——確認。

ハイパーセンサー最適化——終了。

フォーマット
『初期化』及び『最適化』フィッティング——設定カット。

修正プログラム——最終レベル。

——全システム、チェック終了。

戦闘モード——起動。

それが霞霊二にとって、それはどこか懐かしいような感覚だった。

第一話 亡霊との戦い 〈Black Lotus〉

ふたりの侵入者が通路を抜けた、そのひとりである、白いISが広場の中央止まり後ろに方向転換、通ってきた通路を凝視する

「……………来るか……………先に行け、私はここで奴の相手をする。さっさと『シュヴァルツェア・レーゲン』のコアでも機体ごとでもいいから奪ってくるのだな」

「てめえ……………私に命令すんじゃねえ!!」

「言いあいをしている場合か……………阿呆が」

絶対零度並みの凄みのある声音が通路に響き渡る。

「チッ！ 後で覚えてろよ、ガキッ！」

オータムは激昂しながらも目的の場所に進んでいく、その姿が見えなくなった直後に――

「――随分と遅い到着じゃないか？」

通ってきた通路に黒い機体が現れる。

ドイツの第三世代型、シュヴァルツェア・レーゲンの姉妹機、シュヴァルツェア・ツヴァイクを纏った遺伝子強化素体^{アドヴァンスト}が。

「これ以上お前たち好きにはさせないぞ、『亡国機業』！！！」
ファントム・タスク

「やってみせるがいい、アドヴァンスド遺伝子強化素体！」

一触即発、その言葉が戦いの火蓋を切り、4－Eエリアの広場で白と黒の激戦が始まった。



扉を破壊して、視界に直接送られてくるマップを基に通路を下り、曲がり、進んでいく。もう少しで目的の場所に辿り着く、通路を行くオータムが思っていたときだった、突如としてレーダーが反応した――

七〇メートル前方で、ハイパーセンサーで前方をズームして確認する、そこには閉じられている筈だった最後の分厚い隔壁の向こう。ドームの中央に目的のISがシュヴァルツェア・レーゲンがあった、しかし問題は――

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ドームの中央、枢のごとき専用ゲージに収められた黒いヒトガタが手のひらがぐっとこわ張り、手首に嵌められていた拘束具をぎりぎりと悲鳴をあげる。

腕の装甲の拘束具は過負荷に耐え切れず崩壊。ゆらりと持ち上がった手のひらが握りしめられる。上体を前に乗り出す、左右の腕の拘束具が弾け飛ぶ、上体を前に乗り出したことにより、黒い機体に繋がれていたプラグとケーブルが次々に弾け抜かれ、さらに上体を前に乗り出すや、拘束具である左足首の鉄輪がちぎれ飛ぶ。続けて右足の拘束具も同様に弾け飛んでいく、そして自由になった黒の機体

がゲージから離れる。解き放たれた勢いで前方に倒れ込んで床に手をつく格好になってしまった、兎耳の形に似たヘッドパーツが何かに反応するように軽く揺れる、頭だけを軽く持ち上げ、隔壁の向こう通路にいるオータムを見据えている。

「どのどいつだ・・・？」

想定外なこと起きている、強奪するはずのIS、シュヴァルツェア・レーゲンに誰かが搭乗している。頭がうつむいてダラリと垂れ下がっている、黒い前髪で顔がわからない、ISスーツを着ていない、それどころか軍の人間ではない、何故なら軍服や研究員の服ではなく一般人が着る、さながら私服だったからだ。

だがそれは些細な問題だ、誰が相手でも憂さ晴らしには丁度いい、じっくりいたぶってから機体から引っぱり出せばいいと、そうオータムが思っていた瞬間――。

「なっ――！？」

オータムに回避する間はなかった。シュヴァルツェア・レーゲンは二基の推進機から爆発的な加速を生み出し突進してくる。

イクニツシヨン・フースト

それは間違いなく『瞬時加速』だった、一瞬のうちに七〇メートルの距離を詰めた漆黒の機体が間近に迫り、オータムは咄嗟にアラクネの腰部装甲から二本のカタールを抜き、右腕を振り上げる、凶刃が霊二を切り裂こうとした刹那、下からすくい上げてきた左手のひらが右手首を掴み、懐に入り込む、霊二は瞬時加速で生み出した勢いにまかせ、オータムごと前進を開始する。

オータムは反射的に左腕を持ち上げたがこちら、霊二が上から押さえ込む、オータムはカタールを振り上げたまま、霊二と四つに組み合う格好しながら後退、今まで通ってきた基地の通路を凄まじい速度で戻っていく。

「てめえ！？ 離れやがれっ！！」

オータムの怒声と一緒に背後から四本の装甲脚がのび、その先端にある鋭利な爪で霊二を串刺ししようとするが、いきなり背後から叩きつけられる衝撃に悲鳴を上げた。

施設の設備に次々と叩きつけられ、鉄の通路を火花を散らしながら滑っていく、そして背後に迫ってくる、半ば壊れかけた隔壁を見てオータムはぎよっとなった。

あれに叩きつけられたらたまらない、いくらISに操縦者を守る保護機能がついていようと完全には防いでくれない。連続する衝撃の中でオータムはアラクネの八本全ての装甲脚を背後の隔壁に向け、全ての脚の先端が二つに割れるように開き中から銃口が現れ、隔壁に連続して実弾を撃ち込んでいく。

ズタズタに穴だらけになった隔壁を突き破り、4-Eエリアへとなだれ込んでゆく。五十メートルとないその広場を滑空、広場を通り過ぎるとき二機の白と黒のISが銃火を交えている姿がオータムの視界に一瞬入ったが、気にする余裕はオータムにはない、またしても壊れかけた隔壁を突き破って進んでいく。

装甲脚を使い、シュヴァルツェア・レーゲンを撃とうにも連続して起こる衝撃で装甲脚の砲身にズレが生じ、射撃の精度が鈍る。

——— 圧されてる。

とオータムは直感した、底知れない膂力に、漲る迷いのない敵意に。それを操る者の鋼のような意志に———。

「ここから出でいけえ——っ!!」

その者の声が耳朶を打つ。“男の声”——とオータムの頭の片隅が反応した直後、瞬時加速、さらに左腕のマニピレーターが万力の如く握り潰され過負荷に耐え切れず、崩壊。そして外に出る最後の隔壁がオータムの背後に迫る。

八本の装甲脚、先端の砲身が一齐に火を噴く、隔壁は瞬く間に穴だらけになっていく、そして最後の隔壁を突き破り外に出るのと同時に四つに組み合っていた状態からようやく解放された、空中で一回転したオータムが霊二の背後を取る。

同じく姿勢を転換した霊二が再度、右拳を振り上げてオータムに迫る。

その機動性を高さに舌を巻く、最小限の動きで攻撃を回避するオータムは、微かに余裕を取り戻しつつあった。動きが直線的すぎる。相手は素人、とオータムはわかったのだ。



「悪いな、用があるのは向こうの機体だ……!!」

即座にその場を反転、白い02—AALIIYAHは、クラリッサを無視し先ほど広場を通って行った、ふたりの後を追いかける。

「待てっ!!」

ここで逃がすかとクラリッサが白い02—AALIIYAHの後を追うとするが、機体がいきなりガクンと揺れて止まってしまった。

「っ!?!? こんなときにつ・・・!?!?」

クラリッサはすぐに機体のステータス・パネルが表示すると、様々な各種のエラー警告が次々と浮かび上がっている。

稼働試験に入っていない機体で良くここまでもってくれた、そう思いたいのは山々だった、いまは一刻を争う事態に陥っている。先ほど凄まじい速度で広場を一瞬にして通り過ぎて行ったふたつの機体の内、ひとつは間違いなく我が国のIS、シュヴァルツェア・レーゲンだった、しかも誰かが搭乗しており、もうひとりの侵入者とあいまみえていた、クラリッサの左眼がその後ろ姿だけを捕えていた、黒色の長い頭髮を後ろに結って、桜の花弁をかたどった髪留めが目を引いた、その人物をクラリッサは一度だけつい最近で見覚えがあった。

とある事情があつて軍施設に赴いてきた少年のことを。



たかが片手をやられただけではオータムは止まらない。

装甲脚の先端の砲身が漆黒のISに向けとするが、機体の機動性能にもものいわせ、出鱈目に上下左右と逃げる黒い機体には、いまだに一発も被弾していない。

「――ふむ、どういふことだこれは？」

この状況は予想外と言わんばかりの声音、追っ手を片付けてきたのか背後からオータムにとって癪に障る声がした。苛立ちを隠さずに答える。

「どうって・・・見ればわかるだろうが」

「では私がやろう、手助けは無用だぞ、オータム」

「知るかつ！ ガキッ！ 勝手にやらせてもらうからな！」

「ふんっ、お前の出番などないわ」

「何だっ！！」

言い争うふたりにハイパーセンサーが警告が発する。

——敵ISの大口径リボルバーカノンの安全装置解除を確認、初弾装填——警告！ ロックオンを確認——警告——

「「!？」」

警告が発する、ふたりはその場を緊急離脱と同時に超音速の砲弾が飛来した。

「ほう、やる気のような」

後退する、白いISの操縦者が嬉しそうに口元を歪める、この状況を楽しむように笑っている。相手は大口径リボルバーカノンで狙いを定めてながら追ってくる。



大口径リボルバーカノンの残弾数は十七発。無駄弾は撃てない。霊二は小刻みに逃げる、新たに現れた白いISの後ろを追った。あの白いISからとてつもない重圧感プレッシャーが押し寄せ、汗みずくの肌を冷

たく刺激してきた。あいつは危険だと瞬時に悟った霊二は即座に右肩に装備している大口径リボルバーカノンを敵機に向けて発砲した。攻められる側でなく、攻める側に回る。

シュヴァルツェア・レーゲンの右肩の大口径リボルバーカノンの砲身が一撃、二撃と火を噴く。

灼けた大型実弾砲の空葉莢が大口径リボルバーカノンから勢いよく排莢される。

炸裂音と同時に白いISは身を翻し、一撃目を躲し、二撃目も躲していく。

「クッ………まるで遊ばれてる………！」

白いISはもう一機の射線上に誘導するだけで、白いISはいまだに攻撃に転じていない。まだ同じ土俵にすら立ててさえいない。霊二は焦りを感じてしまい、三撃目を放ったがそれも躲される始末、直後に霊二は視覚外、斜め後ろにいる敵の僚機が何十発の徹甲弾を放つ姿をハイパーセンサーで知覚し、機体を横ロールさせ回避する。止まっていたのは直撃弾が来る。咄嗟の直感に従って、すかさず白いISを追い続けていたら白いISが反転、逆に向こうから近づいてくる。

「当たれっ………！！」

肌が音を立てながら粟立つ感覚が襲いかかる。霊二は距離、一二〇メートルにて照準を合わせると自動補正によって白いISをロックオン。

右肩の大口径リボルバーカノンのトリガーを連続して引き搾った、それに応えるように大型の実弾砲が連続で火を噴く。

白いISは連続で放たれた対ISアーマー用特殊徹甲弾を横ロールで速度を落とすことなく避け、近づいてくる。

——懐に入り込まれる、と霊二が思った瞬間、鋭い声音が耳朵を打った。

「当たらなければ、どうということはないっ!!」

02—AALIYAHの独特な形をしたカメラアイ型ハイパーセンサーがぎらりと赤く輝く、右腕の手の甲に量子展開した《02—D RAGONSLAYER》の光刃が足下からすくい上げて来る。

咄嗟に危険と判断した霊二は意識をシュヴァルツェア・レーゲンの脚部ブースターに集中させ点火、一文字に危険域から離脱。白いISの光刃が紙一重の差で空を一文字に斬る、薄紅色の残光が虚空に刻む。

(.....あ、危なかった.....っ!?)

霊二は内心でホッとするが、直前にざわつと背中になぞる悪寒。

狙われた、白い奴に気を取られすぎた。無防備に直線運動をしてしまった数秒を顧み、回避は間に合わない直撃する、霊二は無我夢中で両手を十字にして銃弾を防ごうと意識を目の前に迫る数十発の弾丸に集中させる、すると何故か弾丸がゆっくりと、そして明確に見える霊二に向かっていた全ての弾丸は一メートル手前で空中で静止している。

(.....え? 止まった?)

何が何だか、わからない、霊二は弾丸の全てが目に見えない力場によって慣性が止められているように見えたことだけは理解できた。

「これは？・・・」
アクティブ・イナーシャル・キャンセラー
“AIC”か！」

白いISはやや戸惑った挙動を見せる。機体の無傷を確認した霊二は、詰めていた息を吐き出し大口径リボルバーカノンを隙を見せた白いISに照準を定める。

新たに弾頭が量子構成によって回転式弾倉に装填される。
リボルバー

大口径リボルバーカノンを突き出し白い敵機に向かって第一射、すかさず白いISは反応し躲す、真下に潜り込もうとする白いISに続けて第二射、長距離からの攻撃を防げるのなら、無闇に動き回る必要はない、弾丸なら先ほどの見えない結界で防ぐことができる、発動させる“コツ”はさっき覚えた。なら落ち着いて狙えば当たる。第三射目、超音速の弾丸が白い装甲を赤く照らす。あと一押し、と白熱する脳内に叫んだ霊二は、白いISが制動をかける瞬間を狙い第四射目、身を翻して紙一重で躲す。

「ほう—————！」

と弾けた声を霊二の耳朶に届く。

畏怖、喜悦が入り混じった声に背中にひやりとなった、とうとう本気にさせたと思った、その不意をつかれ、白いISは身を縦に反転した瞬間、瞬時加速で突貫。

まっすぐ霊二に向かって突っ込んでくる。一瞬にして霊二の足下に回り込んだ、と思った時には、下からすくい上げる《02—DRAGONSLAYER》の光刃が迫る、鋭敏に反応した霊二は右手首に搭載されてある超高熱のプラズマ刃を展開、両者の光刃がぶつかりあい、鮮烈な紫電が空に現われる。

「やるではないかっ！」

「退がれっ！！ 退がってくれないと、皆が・・・！」

斬り結んだ光刃が反発しあい、紫電にも似た火花を散らしながら二機が離れる。向こうの白いISは体勢が崩れ、整えるまでの刹那、霊二は射撃体勢も滅茶苦茶のまま大口径リボルバーカノンを離れ際に手動照準で白いISに向かって放つ。白いISは回避しようとした時、白い装甲に直撃の光が爆ぜるのを霊二は見た。

(当たった・・・！？)

見間違いではない、左脚部、踵のあたりに対ISアーマー用特殊徹甲弾が被弾した。白いISは、つんのめるように回転し、体勢を整える。



(・・・・・・当てられた)

体勢を整え、思考する。

自分の知る限り、過去に直撃を受けた事例はない、左踵のIS装甲の損傷を見るたび心の底から湧き上がってくる熱、戦いたいと。それは歓喜に近いものだった。

初めてを奪った相手を見据える。瞬時加速で一氣に間合いを詰めようとしたその時だった。

『そこまでよ、“エス”』

ISのプライベート・チャンネルが頭の中で声が響く。

『状況はモニターして確認していたわ。退がりなさい、ふたりとも予定外な事が起きたけど、これ以上留まるわけにはいかないわ』

『土砂降^{スコール}り』からの指示を聞いた途端に身体から熱が冷めていくのが解かる。

「興ざめ……これから面白くなるところなのに」

スコールの指示にいち早く従ったオータムが既に退いている。

名残惜しいが仕方ないと、白い02—AAL IYAHは指示に従い機体を反転させ撤退する。

顔だけ振り返せ後ろにいる漆黒のISを纏った“男”の顔を忘れないうように胸に刻んでいく。

(……02—AAL IYAH、機体性能は悪くない、けどもう限界かもしれない。私の反応に追いついてくれるのが精一杯か、“コジマ”に頼んでみるか……)

「……………退いて……くれた？」

敵はすでに雲の向こう側へと消えていく。

白いISと蜘蛛のISの後ろ姿が見えなくなるまでドイツ連邦共和国、国内軍事施設の上空で見続ける零二だった。

この事件の一件はドイツ政府内で最高機密扱いされ、誰も予想だにしていなかった男性IS操縦者の登場に世界が震撼するまで、残り一年と半年間猶予が霞霊二に言い渡された。

第一話 亡霊との戦い 〔Black Lotus〕（後書き）

思えば原作のシュヴァルツェア・レーゲンの大口徑リボルバーカノンは“左肩”に装備している設定の筈ですが、アニメだと“右肩”に装備している・・・設定ミスなのかな？ それとも都合の問題だったのだろうか？

第二話 再会 (FLASH BACK)

『IS』

正式名称『インフィニット・ストラトス』宇宙空間での活動を想定として作られたマルチ・フォームスーツ。

しかし『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持て余した機械は『兵器』へと移り変わり、しかしそれはいつしか各国家の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた——所謂、飛行パワードスーツ。

科学によって今の時代に現れた、絶対的な力を持つ『IS』には致命的な欠陥があった。

それは“女性”にしか使えないということだった。



からりと晴れた空。鮮やかな青を泳ぐのは白い雲。

風に揺れる鳥の濡れ羽色の長い頭髮は桜の花びらをかたどった髪留めで後ろに結ってある。優しさと儚さを兼ねた中性的に整った容姿。少年がとある学園に到着したのは二時間前。そしてこの広大な敷地の校舎を迷いながら歩き続けて約十分程度の時間が経っている。三時間目の開始を告げるチャイムが鳴り終わりやっとう学園に入ることができたのだった。

「……………どうしよう」

独り言を言って立ち止まり辺りを見回すが廊下には一人も人の姿はない。おそらくもう三時間目の授業で皆は教室の中から人の気配を感じ取る。

（自分の教室が分からない以上、無闇に教室に入るのはちよつと・・仕方ない職員室に行こう）

足は職員室と向かおうとしたが、不意に立ち止まる。ある教室から聞き覚えのある声が聞こえたからだ。

（今、千冬さんの声が・・・・まさか）

そつと一年一組の教室のドアの横にしゃがみながら耳を澄ませると。

「はいっ。 織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

と女子の声が聞こえてきた。

（千冬さんを推薦？・・・でも織斑“くん”と言ったということとは・・・）

このまま教室の中の様子を聞くことにした。

「では候補者は織斑一夏・・・他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺!？」

少年の耳にはつきりと聞き覚えのある二人の声が聞こえた。

（一夏と千冬さんの声だ、千冬さんがここにいることはこの学園の先生ということに・・・入学早々、遅刻した者には容赦なく鉄拳

制裁が・・・駄目だ、ここにいて千冬さんに見つかったら拙いさ
っさと職員室に―――)

そう思いこの場を離脱しようとしやがみ歩こうとした時、教室のド
アに迂闊に近づきすぎたのかいけなかったのかドアの上部の赤外線
センサーが反応して自動でドアが開くスライドして。

「ッ!？」

咄嗟に条件反射でドアが完全に開ききる前にドアの前から離脱する
が、おそらく教室の中にいる一年一組のクラス全員及び先生方の視
線を集めてしまった。現在、授業中であり廊下には誰もいない筈で
ドアが開き、そして誰もいないなんて誰がどう見ても不自然だろう。

「「「「「・・・」」」」」
・・・「「「「「

開いたドアが自動で閉まり重い沈黙の中で息を潜ませる少年であつ
た。



「「「「「・・・」」」」」
・・・「「「「「

おかしい、とクラスの生徒全員がそう思わずにはいられない。三時間目、イギリスの代表候補生、セシリアとクラス対抗戦に出るクラス代表を決める為の決闘をすることが決まり、千冬姉が授業を再開しようとした途端、突如として開いた教室のドア、しかし開いたドアの向こう廊下側には誰もいないのだから。これをおかしいと思わないほうがおかしい。

「・・・・・・・・・・まさか」

ぽつりと千冬姉が呟きドアが勝手に開いた原因を確認すべく教室の外、廊下に出ていくと。

「何している、お前」

どうやら外に生徒が隠れていたようだ。

「何って反省のポーズです」

ズゴン、と廊下から鈍い音の幻聴が聞こえたのは気のせいだ——あれ？ 今、聞き覚えのある“男子”の声が聞こえたのは気のせいじゃなかった。

でもこの“学園”で“男子”は俺だけのはず、など考えていたら千冬姉が盛大に遅刻してきた生徒をつれて教室に戻ってきた。

クラス全員がその遅刻してきた生徒を見て驚いている。そりゃそうだ。だってその生徒は俺のよく知っている。

——幼なじみだったのだから。



『IS学園』

IS操縦者育成特殊国立高等学校。ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営及び資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし当然機関で得られた技術などは協定参加国全体が理解できる解決することを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。―――IS運営協定『IS操縦者育成機関について』の頃より抜粋。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

重い沈黙。それはそうだろう。例年ならいざ知れず、今年には異常な事に“男子”が二人もいるのだから。IS学園は名目上、女子高ではない。男子は入学お断りなどの学園要項には書かれてはいないはず。

けれどISを起動できるのは“女子”だけである以上、事実上IS学園は女子高。そんな女の園に新たに現れた“二人目の男子”が目立たない筈がなく。この教室にいる男子が一人ではなく二人ということだろう。必然周囲の目も二人目の男子に注がれている。

しかし、今、現在直面している問題は、それほど生やさしいものではない。それは阿修羅を凌駕するほどの冷徹な怒りを漂わせる御仁、織斑千冬。

そう認めたくはない事であるが“二人目の男子”は入学早々から遅刻してきたのだ。しかも既に三時間目。

「さて、遅刻した言い訳を聞こうか？」

まるで死刑宣告のようにその教師、織斑千冬は言った。

少なくとも、それは顔見知り対する声色ではない。

（何か言わなくちゃ……さもないと殺^やられるのは必定！）

意を決して二人目の男子は言う。遅刻した言い訳を。

「このIS学園へ向かっていた途中で忘れ物したことに気づき、急いで“実家”に戻り……」

自分の実家の庭の広さ、そして実家に続く石階段の長さはIS学園に匹敵するのではないかとそう思えるようになる。

「ほう、それで」

「そして全力でIS学園へ向かったのですが、既に時間が……また広大なIS学園の敷地に迷ってしまって……その、現在に至ります」

「そうか。そういう事情があるのならば……」

「ゆ、許してくれるんですか!？」

「反省文三枚で勘弁してやる」

罰を告げられた。人生、そう上手くいかないのが現実だ。反省文三枚で済んだのだ良しとすることにしよう。

「……アイ・ママ」

つい、言ってしまったと思った時には既に時遅く。

パアンと千冬は持っていた出席簿で少年の頭を殴った。これで千冬が少年の頭を殴ったのは二度目だ。しかし二度あることは――。

「ここは軍隊ではない。返事は『はい』でいい」

「はい、織斑“教官”」

三度、少年の頭に今度は二度目の鉄拳が襲う。

「教官ではなく先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「よし。では皆に自己紹介をしてから席に着け」

「あ、はい。えっと霞^{かすみれいじ}霊二です。これから一年、よろしく願います」

霞霊二は自己紹介を告げてクラス生徒に向かって一礼をする。

此処は世界中の生徒が集まるとはいえ日本の学校、当初の座席は『あいうえお順』なのだろうか。一夏は織斑の『お』であり。霊二は霞の『か』であるため真ん中の最前列から二番目の席、一夏の後ろに席に着く。

今日来日してから始めて入学当初から遅刻した二人目の男子である霞霊二はクラスメイトほぼ女子の視線を感じながら授業に集中するのであった。



(どうしよう……全然わからない)

今、靈二が直面している問題それは。
それはIS。

いやISについてはドイツ軍に居たころISの事が理解出来たという訳ではなく。ISの事を全く理解出来ていなかったということを理解したのだ。靈二はひとまず周りの様子を伺う。現状で授業についていけないのは、靈二の前の席にいる。同じ男子生徒である一夏だけ。

靈二はIS学園に入学する二日前、実家で電話帳のように入学前に必読と書いてあった分厚い参考書を姉であるスミカに渡されたのだ。幾ら何でもあの量を一日で覚えろ、なんて言われたが不可能だ。せめて一週間前、いや一ヶ月前に欲しかった。

(どうか指名しないでください・・・・・・)

もしも織斑先生に「この問題を・・・・霞」なんて指名されたらどうなる。考えるまでもないISについて全く理解できていない靈二が答えることはできない。それだけは避けたいのだ。今、出来ることはただ指名されないことをただ祈るだけであった。



そして・・・・祈りは届いた織斑先生は指名することではなく三時間目の授業が終了。休み時間へと入った。

(よし、始めに――)

靈二は行動を起こすことにした。現在このクラス内に靈二と面識があるのは――。

「一夏ア!!」

「うお!？」

霊二の突然の叫びに一夏だけではなく他の女子生徒が全員が驚いて肩を震わせる。その隙を見計らい一夏の腕を霊二が掴むと、そのまま廊下に引っ張っていった。女子生徒は突然の出来事に反応できず呆然と立ち竦むしかなかった。



― I S 学園屋上 ―

「久しぶり。一夏、元気だった」

一夏の口がポカンと口を開く。

「あ、ああ、俺は元気だ。霊二も久しぶり」

一夏と霊二は一年と半年ぶりの再会に笑いあう。

「そういえば、霊二、突然転校だなんて、それをスミカさんから聞いて、みんな驚いたぞ」

「ごめん。急な事だったんだ、一夏や皆に何も言わずにいなくなつて本当にごめん……」

流石に別れの挨拶すらできなかった事に負い目を感じている霊二だった。

「謝ることないさ、急な事だったんだろう？ 仕方ないさ」

「理由は聞かないの？」

「いいって、こうして霊二と会えたんだから」

ただ一夏は純粹に霊二と再び会えたこと喜んでいるようだ。

「そっか……それにしても、一夏もIS動かせるなんてニュース見た時なんか驚いたよ」

「それはこっちの台詞だって。霊二もIS動かせるなんて、テレビとか全く放送なかったよな？」

「あー、それはね。でも今頃、世界中で放送していると思うよ」

霊二がISを動かせると分かったのは今から一年と半年前のドイツ軍事施設で起きた一件のこと、その情報が世界に漏洩する前に霊二の姉である。

『霞スミカ』と現場に居合わせた政治的に発言が高い『オーメル・サイエンス・テクノロジー』の幹部が迅速にドイツ政府に条件を掛けあっていたのだ。

その条件とは霞霊二がIS学園、高等部入学するまでの間、霊二がISを起動させたという情報を一片も世界に流出させるなどということと期限の内にドイツのIS配備特殊部隊で世話を見ろという内容だった。

ドイツ政府もそんな条件を呑むとは思えないように思えたが政府は意外にもその条件を認めたのだ。それはドイツで第三世代型ISである試作機が『亡国機業』に軍事施設を襲撃され強奪されそうなところ偶然その場に、とある事情があってドイツの軍事施設を訪れ

ていた霊二。

民間人の立場でISを動かし、さらに戦闘状況にも介入してしまったなど重大な違法行為なのだが前例がない男性IS操縦者など貴重なISを襲撃者に奪われずにすんだ事など様々なネタでスマカは脅しにも似た交渉を政府としたに違いない。

そうして、期限が終えて今頃テレビで世界全体に放送しているはずである。

「……ちょっといいか？」

背後から声がして霊二が振り返るとそこには肩から下まである長い黒髪をリボンでポニーテールに結った一人の女子生徒がいた。

「……もしかして、箒？」

その女子生徒は六年前に別れた幼なじみの篠ノ之箒だった。

「よ、よくわかったな」

「わかるよ。六年ぶりだけど俺たちは幼なじみだし、だろ一夏」

「ああ、忘れないだろ、幼なじみの事くらい」

霊二にとっては織斑姉弟だけじゃなく箒もいることは流石に予想外だった。ちなみに箒が“篠ノ之束”の妹だからといって特別に思う所はない。

そんな時だった。四時間目の授業五分前のチャイムが鳴り響いたのだ。

「えっ！？　もうそんな時間？」

まだ三人とも話したいことがあるが仕方ない。それにもう何時でも会えるのだから。

「やばい、授業に遅れるぞ！」

「わ、わかっている！」

慌てて一年一組の教室に戻ろうとする三人組。

その途中で霊二は一夏に聞こえないように箒に問いかける。

「ねえ箒、一夏とは上手くいつているの？」

「い、いや……その……だな。私も今日。六年ぶりに再会したばかりで……」

「そっか。応援するよ。箒」

霊二は知っている一夏の鈍感さは一筋縄ではいかない。だからせめて箒に応援を送るのだった。

「ああ、すまん」

そうやって二人が話していると。

「何の話をしてるんだ？」

「な、なんでもないっ！」

一夏が二人の会話に気づき会話の内容を聞こうとすると箒がわずか

に頬を赤らめやや怒った口調で答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060y/>

Infinite Stratos Pray for Answer

2011年11月12日20時19分発行